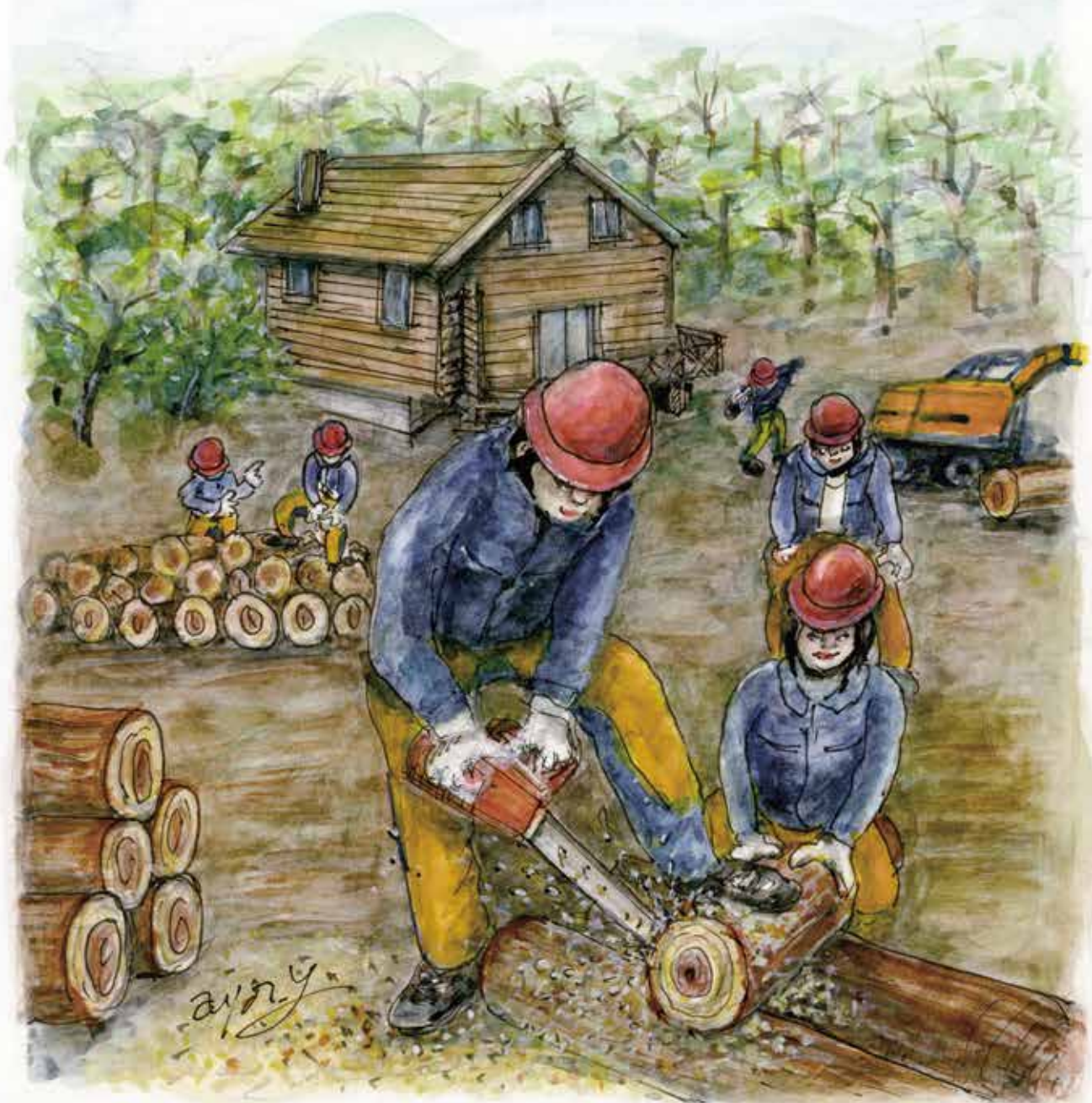


舞

たうん

Vol. **147**
2021.10

特集 ▶ 森林資源活用で
地域の未来を伐り拓く



■はじめに

我が国では、森林面積が国土の3分の2を占めているにもかかわらず、山は“負動産”として扱われ、豊富な森林資源が有効に活用されていない…。この現状を何とかできないだろうか。

近年、SDGsへの関心が高まる中、2020年秋の国会で菅総理大臣から「2050年に日本の温室効果ガス排出を実質ゼロにする」との方針が示されましたが、このような目標達成のためにも、カーボンニュートラルである森林資源の活用や、林業の再生がキーポイントであり、そのことが地域活性化にも大きく寄与するものと考えています。

今号では、「森林資源活用で地域の未来を伐り拓く」と題して、持続可能な地域社会を目指す取組みについて紹介しています。本誌を通じて、皆さまの地域で明るい未来が伐り拓かれることを願っています。

(研究員 兵頭 一輝)

■表紙のことは

林業と言えば、3K「キツイ・汚い・危険」の代表格と言われてきましたが、近年では高性能機械の導入による省力化、ICTの活用による効率化もあり、「稼げる・カッコイイ・気軽に」というような、新3Kに変わりつつあるようです。“林業女子”という言葉も耳にするなど、林業を志す若い女性も増えているようで、衰退産業とされていた林業の可能性が、広がってきているのだと感じます。

木の温もりに触れて心を落ち着かせ、人が本来生きてきた自然を見つめ直すことで、未来のためになすべきことが見えてくるのではないのでしょうか。

柳原あや子



●アングル

「森林資源活用で地域の未来を伐り拓く」

井筒 耕平/株式会社sonraku 代表取締役 …… 1

●特集/森林資源活用で地域の未来を伐り拓く

①子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原へ

「森林づくりは人づくり」

立道 斉/梶原町役場 森林の文化創造推進課 …… 4

②森林資源活用で地域の未来を伐り拓く

岡本 直也/津和野町役場 農林課 …… 6

③「誰か、一緒に、やれへん？」

米地 徳行/NPO法人木育フォーラム 理事長 …… 8

④地域を巻き込む 男5人によるクロモジストーリー

白川 凜太郎/初代クロモジチーム 代表 …… 10

●地域おこし協力隊 リレーレポート

竹あかりが教えてくれたこと

シーバース 玲名/西予市地域おこし協力隊 …… 12

●えひめ暮らしネットワーク通信

えひめ暮らしネットワークの活動について

鍋島 悠弥/一般社団法人えひめ暮らしネットワーク 副代表 …… 14

●特選ブログ/shin1さんの日記

森林資源活用で地域の未来を伐り拓く

若松 進一/人間牧場主・年輪塾々長 …… 16

●“MY TOWN” うおっちゃんぐ

四国唯一の本ウダツ建築・高田鍼灸院(八幡浜市)

岡崎 直司/タウンツーリズム講座主宰・近代化遺産活用アドバイザー …… 18

●まちづくり活動アシスト事業報告

①夢をもって生きていくことが出来る未来と

今だから出来る貴重な体験

小野 志保/パソきつず 代表 …… 20

②「ながはまKuruKuruマルシェ」で地域貢献

～未来に向けてより良い地域をつくっていくために～

宮本 浩子/NPO法人ブルーキャットながはま 代表 …… 21

③「地域活性化の先にあるモノ」～コロナ禍における地域活動のカチとは～

原田 浩明/地域新聞みあき 代表 …… 22

④「閉校した小学校の有効利用で地域活性化を目指して!!」

藤田 一郎/中浦会 代表 …… 23

⑤「中萩親路の会の活動と、助成金の活用について」

村尾 孝志/中萩親路の会 会長 …… 24

⑥地域のお宝再発見「潮見地区史跡八十八ヶ所巡り」

～いっしょにやろや!宝さがしのまち歩き～

畑中 俊三/潮見地区まちづくり協議会 会長 …… 25

●研究員卒業レポート

センターでの2年間を振り返って

徳永 瑠衣/客員研究員(今治市役所) …… 26

●Information センターからのお知らせ

ホームページ紹介

えひめ地域づくり研究会議 会員募集

賛助会員紹介

賛助会員募集

えひめ地域政策研究センター …… 27

「森林資源活用で 地域の未来を伐り拓く」

森林資源へのまなざし

森林資源はマテリアル（家具、建築資材など）とエネルギー（電気、熱）の2つの活用方法があつて、いずれも地域の持続可能性を高めることにつながる。前者は外貨獲得だろうし、後者は流出しているエネルギーコストを減らすことによつて、いずれも地域経済を潤すことにつながるからだ。

あわせて、森林を管理することによつて、昨今の大きな問題となつている「土砂災害」と「獣害」という2つの森林が関わる現代病についてアプローチすることにつながる。

経済性だけでない観点も森林資源は取り扱うわけで、「地域の未来」と言った時には、こうした複合的な視点で森林資源を眺めつつ、ビジョンを描き、そして具体的な活用に向けた取組みを進めていく。よつて、一朝一夕にものごとは動かず、じっくりと、長い目で少しずつ小さなイノベーションを起こしていく分野なのである。

大きな林業と小さな林業

森林を活用する際には、広葉樹林と針葉樹林、あるいは天然林と人工林という分類をする。一般に、広葉樹林は天然林で、針葉樹林は人工林であることが多い。人工林は、戦後の拡大造林時期に多く植えられたものであつて、50-60年生の林齢に偏つている。

そうした森林が多いというのは、つまりは収穫の時期に来ている森林が多いということだ。逆にいえば、こうした収穫の時期に日本社会は初めて直面したとも言える。伝統的な林業地でない限り、人工林という森林資源に初めて向き合う地域が大半なのである。ちなみに、石油が普及するまでは、森林資源は新炭利用されてきたので、そうした暮らしに直結する活用方法で森林資源には向き合つてきてはいた。しかし、今度は人工林である。

人工林とどう向き合うかは、丸太単価と、林野庁の制度に左右される。丸太単価は最高値（1980年）から比べれば大幅に下がつており、林野庁の制度とし

株式会社 sonraku
代表取締役 井筒 耕平



ては大規模化林業に向かうようインセンティブをかけ（面積あたり搬出される量が多いほど補助額が高い）、単価の低下を吸収するような働きかけをしている。



<https://hadatomohiro.com/maruta-kakaku/>

林業は、雇用者数も少なく、ほとんどの国民が森林資源活用に関する分野の土地勘もないため、非常にクローズドな世界であり、人がいなくても林業ができるような大規模機械を導入するのが現実的、という解を国は出しつつある。そこに制度的なインセンティブもあつて、大きな林業が広がる。小さな林業の可能性はないのだろうか

か。地域の住民、若い世代、他分野企業の新規参入などの可能性はないのだろうか。以下は森林資源活用に関する新しい取り組みを紹介する。

ShopBotが描く、小さな製材の可能性

小さな製材機であるShopBotは、VUILD社が米国から輸入し、全国に50を超える導入事例がある。ShopBotとは、3DCADで設計図を描き、それを自動的にカットしてくれる機能を持つ製材機であって、いわばテックノロジー×林業の1つの具現化されたものである。



花巻にある小友木材店のShopBot

筆者が訪問した岩手県花巻市の小友木材店では、4年前に導入した。20代の女性が担当者で設計、製材、仕上げを担い、事業部長が企画、営業、提案などを担う役割分担によって、木育現場、店舗内装のほか、提案型でのオリジナル製品などを販売している。1年前にオープンした花巻おもちゃ美術館も運営しており、シナジー効果が出ているとのこと。PCと製材機を駆使する新しい働き方が、ShopBotを通じて生まれており、非常に可能性を感じた訪問であった。

「小さな不動産×エネルギー事業」という宮城での挑戦

バイオマスエネルギーは、本来は分散する森林資源を分散的に使うことが合理的と考えるが、FIT制度によってバイオマス発電は規模が大きいほど採算性が上がるため、大きな発電所(数十MWクラス)が日本中に林立している。

こうした状況下で新しい挑戦が生まれている。宮城県鳴子温泉エリアで(株)ウエスタ・CHPが仕掛ける集合住宅と小型バイオマスCHPの取組みである。CHPとは、Combined Heat and Powerの略であり、熱電併給と訳される。木質チップから複数のガスを取り出し、エンジンで燃焼させ、回転力を使って発電する。その余剰熱は集合住宅の給湯と暖房に使



鳴子温泉エリアの小型CHP

われる。導入されている発電規模は50kWであり、大規模バイオマス発電所に比べて1/1000程度である。それでも30世帯分の熱利用ができる。

事業者であるウエスタ・CHPは、そのグループに素材生産(間伐、作業道開設、皆伐など)、製材業、チップ生産業などを有しており、既存事業とのシナジーを想定する。エネルギーはインフラであって、コモディティ化は避けられないことから、付加価値の高い森林資源活用および他分野事業(ここでは不動産)との複合的な事業は理にかなっている。

北海道での森林資源活用の挑戦から見える可能性と課題

筆者は、北海道を主な事業拠点として新しい挑戦を始めている。具体的には厚真町と士別市で、素材生産、製材、エネルギーという森林資源活用の上流から下流までを、他分野事業も含めた開発を始めたところだ。

厚真町では、まず1つ、小さなバイオマスCHP事業を開始する。これは前述の鳴子温泉での取組みと同規模であり、電気は電力会社へ売電、熱はチップを乾燥させて外販する取組みである。厚真町は、2018年に起こった北海道胆振東部地震で大きな被害を受けたエリアであり、森林も4000ha程度が崩れてしまっている。当時、全道でブラックアウトも起こってしまったことから、町主導でエネルギー×防災の取組みを始めていくフェーズでもある。こうした動きと連動しながら、民間側でもまず1つCHP事業をスタートさせ、今後は町と足並みを合わせて分散型エネルギーによるまちづくりに貢献したいと考えている。民間企業1社では大きな動きはできないが、分野や役割を超えるチーム戦で進めていくつもりだ。

士別市では、イトイグループHDという企業に筆者自身がジョインして、森林産業に参入する役割を担わせていただいている。土建業者であるイトイグループ

は、スポーツ、福祉、飲食・宿泊などの多岐にわたる事業展開をスタートさせており、ここにエネルギーや製材、素材生産業を組み込んでいく。



イトイグループのチップ生産現場

いずれも課題は木材調達と人材調達である。木材は、大きな発電所の林立によつて、低質材の単価が上がり、また需給も逼迫気味である。道内では、数百キロも離れている場所に木質チップを運搬しても、チップ販売側の採算が合うほどの状況となっているが、一方でチップ価格の上昇とともに小さな事業では採算性が低くなっている。しかしながら、これはFIT売電のための「未利用材」と分類される材に限ったものであり、未利用材ではない丸太、枝葉や抜根などはまだまだ活用されていない。人材については、士別の場合にはスキージャンプチームや北海道ベースボールリーグ、eスポーツに参入することで、若者が雇用の場として集まっている。人材調達とスポーツ選手のセカンドキャリア問題という両課題を同時に解決する動きであり、イトイグループには感服する。

どちらの地域も共通する課題があつて、それぞれの解決方法で事業を推進していく予定である。そのコンセプトは、

エネルギーを起点にした複合的な事業を行うこと。そのことが、木材や人材の不足を補い、採算性も上げていける方法であり、かつ社会的な価値が高いことであるのではないだろうか。



イトイグループのスキージャンプチーム

プロフィール

井筒 耕平

環境エネルギー政策研究所、備前グリーンエネルギー(株)、美作市地域おこし協力隊を経て、2012年より現職。博士(環境学)。バイオマスエネルギー分野を基軸に、分野を超える新しい事業創造を目指しており、スポーツ、林業、福祉、不動産、観光など掛け合わせたプロジェクトづくりを仕込む毎日。現在は、バイオマスCHP事業の開発を各地で行っている。共著に「エネルギーの世界を変える。22人の仕事(学芸出版社)」「持続可能な生き方をデザインしよう(明石書店)」などがある。

子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原へ
「森林づくりは人づくり」

梶原町役場 森林の文化創造推進課 立道 育

雲の上のまち梶原

梶原町は高知県の西北部に位置し、四国カルストの麓にある、町面積の91パーセントが森林の町です。

人口は約3300人。町の北側と

西側が愛媛県に接し、伊予と土佐を結ぶ街道の町でもあります。かつては、大型バスの乗り入れができないほど曲がりくねった急峻な道が続き、高知市まで車で数時間もかかり、「梶原の人」と言えば、とても不便なところから来た人と評される地域でした。現在、道路の改良が進み、松山市・高知市まで90分程になりました。

こうした地理的な要因から、自分たちとは自分たちで、地域のことは地域で、町のことは町で担っていくという、高い自治意識が風土と文化として醸成されています。

町史には、明治期に「不要公課計画」を掲げて積極的に植林に取り組み、その収益をもつて公共的な費用を捻出する、公課のいらぬ理想郷づくりに取り組んだとの記述が残されています。



森林の面積91% (町の中心地)

持続可能で豊かな森林づくりへ

「昔は、数字のことは言わなかった」。現場で出会った林業家の方の言葉です。経済優先、効率優先のなかで、いつから森林は原木生産の場のみになったのかと考えさせられました。そして同時に、祈りや感謝、思いやりという大切にすべき基本を失ってきたのではないだろうか。森林の再生がクローズアップされる中で、私たちが自然とともにある生き方を考え、改めて自分の中にある人間性を取り戻していくことが必要なのかもしれません。もつと森林を身近なものに、そして、森林本来の価値を正しく取り戻すために、令和2年4月、本町に国・県企業・森林組合の出向者を迎え、新たに「森林の文化創造推進課」を設置。地域の林業関係者の皆さんと協議を重ね、改めて森林と向き合い、令和の森林づくりとして「森林の価値の再定義」を掲げ、取り組みをスタートしました。

動き出した森林づくり

令和2年6月、町が各事業体に呼びかけ、持続可能な森林づくりに向けて、林業の活性化、林業従事者の確保・育成を目的とし、林業事業体や建設会社などの有志により「梶原令和の森林づくり協議会『REMORI』」が発

足。REMORIでは、地域おこし協力隊を3年間雇用し、会員の事業体で研修を行い、令和7年までに20名の育成を目指しています。

これまで、林業の担い手育成は各事業体それぞれが独自に行っており、募集情報の発信ができないなど、希望者とのマッチング自体が難しい状況となっていました。また、林業技術の習得には、様々な資格が必要となることや経験値が求められ、費用と時間が必要となります。そうした背景から、新規就業者の定着率の低さも大きな課題となりました。

現在、町内の林業従事者の半数が60歳以上となっており、持続可能な森林づくりを行ううえで、担い手の確保は急務となっています。

10年後、20年後の未来を見据えた時に、町としてもう一歩踏み込んだ取り組みが必要との考えから、令和元年12月に、事業体有志の皆さんと「未来の森林づくりにむけての意見交換会」を開催。会の中で、「先人の皆さんから受け継いだ森林を生かすこと」



著者:前列左

©Taisuke tsurui



協力隊研修風景 (ひと休み) ©Taisuke tsurui

令和2年9月、若手林業家有志7名により、林業技術の向上と交流を目的とする梶原町森林づくり若手研究会「CoMORI」が発足。普段は別々の事業体で仕事をしている会員が、職場の垣根を越えて、週末に集まり、住宅裏の危険木の伐採を請け負うなどの活動を行っています。また、こうした特殊な伐採を安全に行うため、ロープを使って木に登る技術の習得にも挑戦。町の太郎川公園でイベントを開催し、子どもたちに木登り体験の場を提供するなど、林業技術をレクリエーションに活用し、活動の幅を広げています。

林業現場は、どうしても孤独になりやすい職場環境ですが、この活動を通じて互いに切磋琢磨し合うとともに、地域の皆さんとの交流により、森林と人との懸け橋となって活動してくれています。また、移住者である協力隊員

立ち上がった若者たち

「担い手を育成していくこと」について積極的な意見が出されました。「林業を担う方を確保することは難しい」という見方が大半を占めるなか、森林と町との懸け橋となり「担い手を受け入れ、育成する仕組み」が必要との結論に達し、ReMORI発足へとつながりました。令和2年7月には、第1号となる協力隊を雇用し、現在は、伐採搬出する作業に加えて、植えて育てる造林作業へと研修の幅を広げています。

事業体の皆さんは、この豊かな森林を資源として、梶原に定住してもらいたいと言います。つまり、梶原の未来を担っていたたくさんの人に貢献したいのだと。

梶原森林づくり大学構想

とも、公私ともによき関係を築いてくれており、地域における若者の居場所と出番づくりの場へとつながっています。

CoMORIが設立され、ひた向きに森林作業に打ち込み、地域への貢献に取り組む若者の姿は、まさしく森林づくりは人づくりであることを実感するとともに、こう



梶原森林づくり大学構想



CoMORI活動(地域の方と)

した取組みを通じて、林業の担い手の育成と若者の居場所と出番づくりに取り組んでいくことが必要であると考えます。

そこで、ReMORIによる伐倒・造林技術の研修に加え、特殊伐採の技術、ICT等による森林づくり活動などを学び合い「高め合うことができる仕組み」梶原森林づくり大学構想」を令和3年4月にスタートしました。

この取組みは、地域の林業関係者や地域おこし協力隊に加え、大学等の研究機関、町外の先進事業者や環境先進企業の皆様とともに森林づくりについて考え、学び、実践することを目的とし、「技術者の育成」「人材の保存」「技術の継承」を図ろうとするものです。

先人から託された本町の豊かな森林を、人づくりと交流の拠点として、次世代に託せるよう取り組みます。

誰もが森林の恩恵を享受できる社会へ

森林の再生を果たしていく中で、既存の枠組みを超えた新しい林業、森林づくりへの挑戦が求められています。

世界は、afterコロナの時代へと変化を求められており、こうした時代であるからこそ森林とともに生きてきた森林の民として、森林の多様な価値をしっかりと発揮させ、林業の持続的な発展に取り組むことで、子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原を築いてまいります。

昭和20年から30年にかけて植えられ立派に成長した梶原の森林に、苗木と鋤を担ぎ、道なき道を登った先人の姿を感じながら。

森林資源活用で地域の未来を伐り拓く

津和野町役場 農林課 岡本 直也



町消滅の可能性

消滅可能性自治体という言葉を知っていますか？これは2014年に日本創成会議が発表したものであり、2010年から2040年にかけて20〜39歳の若年女性人口が5割以下に減少する市町村区のことです。そこで発表された消滅可能性ランキングで49位にランクインしたのが私の住む津和野町でした。（全国には約1800市町村がある）

津和野町は、島根県西部に位置する、人口約7000人の町で、山陰の小京都とも称される城下町であり、年間100万人が訪れる観光地です。しかし、消滅可能性自治体に挙げられるように、人口減少率がマインス10%超えと人口減少が問題となっています。

ヤモリーズの誕生

先述のように人口減少対策が急務であったこと、町面積の9割を占める山林が担い手不足により放置されていることが多くなっていたことから、津和野町では山林を活用した仕事づくりに取り組み始めました。

そして、山林の活用法を勉強している際

に自伐型林業を知り、現行林業よりも参入のハードルが低く、災害にも強い林業だと知ったことがきっかけで、自伐型林業を津和野町の新しい生業とすることを決めました。また



ヤモリーズ集合写真

自伐型林業の実践を行うに当たり、地域おこし協力隊（都会から田舎へ移住し地域振興に携わる制度）を組み合わせることで、人口減少対策+林業の担い手不足の解消を図っています。こうして始まった自伐型林業×地域おこし協力隊事業ですが、地域おこし協力隊の林業チームでは味気ないですし、親しみやすさもないので、「山を守る」にちなみ、「津和野ヤモリーズ」と命名して活動を始めました。

自伐型林業の実践

津和野町が実践する自伐型林業は幅員2・5m、切取法高1・4m以下を基本とした『壊れない作業道づくり』と長伐期択伐施業による持続可能な林業で、ヤモリ

ズでは自伐型林家として独立出来るよう3年間、作業道開設や間伐搬出の技術習得の研修に励みます。

ヤモリーズに入ってくるメンバーのほとんどがチェーンソーを持ったこともない林業未経験者ですが、3年間の研修の中で立派な作業道を付けるようになるので、メンバーが作った道を地元の方に見ていただくと、「たった3年の研修でこれだけの道を作るんか」、「こんな道が出来るなら、うちの山もやって貰いたい」といった感想を頂きます。担当者としても作業前はただの山だったところ



間伐の様子



作業道開設の様子

に立派な作業道が作られていくのを見ると「凄いな」と毎回感心させられます。

地域に溶け込む工夫

移住者であるヤモリーズのメンバーが津和野町で自伐型林家として生きていくためには技術習得だけでなく、地域に溶け込み、関係性を築き、山を任せてもらう必要がありますので、地域に根付く工夫として住居はアパートではなく、津和野町で行っている空き家バンク制度を利用し、空き家を借りています。そして、空き家の中でも、町の中心部ではなく、山間部の空き家を借りることとしています。その狙いとしては、山間部に住むの方が山を所有している割合が高いので、田舎ならではの自治会活動や消防団に参加してもらい、地元の人に顔を覚えてもらうことで山を任せてもらいやすくなるためです。こうした作戦により、卒業生が住む地域の山の整備を任せてもらっている例もあります。

地域の活性化

平成26年の11月から事業が開始し、これまで22名の方が津和野町へ来てくれました。22名のうち、5名がヤモリーズとして研修中、1名が農業の道へ（現在も津和野町在住）、6名の方が転出してしまいました。8名が自伐型林家として生計を立てており、2名が林業に携わっています。その中でも家族で移住してきたメンバーや津

和野町に来て結婚し、子供も生まれたメンバーもいる

など人口減少の減速化、地域の活性化に大きく貢献してくれています。また、独立したメンバーに



小学校での森林学習も担当している

の話を聞くと、「家族を養っていける稼ぎはありますよ」、「大変だけど、山に入っ

て仕事をするのは楽しいです」と答えてくれるなど取組みに一定の成果が出ていると感じます。そして、協力隊×自伐型林業は人口減少対策十担い手不足の解消の他にも相乗効果を生んでいます。例としては、木の生産を行っている地区の森林整備を行う際に、作業道を柵林に接するよう

今後の展開

津和野町では令和4年度に木質バイオマスガス化発電所（40kw×12基、480kw）が稼働予定であり、材の買取り価格が上がることでより一層、森

林整備が促進されることが想定されています。

その中で、ヤモリーズという木の出し手は育ってきているので、今後は木を加工し、利用する人材の育成、仕組み作りに取り組み、材の価値を上げるとともに様々な形で木材が利用出来るようになればと考え

ています。最後になりますが、これからも引き続き、中山間地域の再生モデルとなるよう事業を推進していきます。



津和野ヤモリーズホームページ <https://tsuwano-yamorries.com>



津和野ヤモリーズブログ「note」 <https://note.com/tsuwanoyamori>

ヤモリーズ施業履歴

年度	H27		H28			H29				H30		H31		R2		合計
	1	2	1	2	3	1	2	3	4	1	2	1	2	1	2	
作業道開設延長 (m)	408	646	901	1,090	1,100	872	1,518	1,247	563	529	550	1,113	667	559	639	12,402
間伐面積 (ha)	2.04	2.18	1.67	3.28	2.61	間伐は次年度		3.61	2.58	3.69	5.1	3.55	2.28	1.51	1.58	35.68

「誰か、一緒に、やれへん?」

NPO法人木育フォーラム 理事長 米地 德行



木育活動を始めたきっかけ

皆さん、森が一番少ない都道府県をご存知でしょうか?答えは大阪府。森林率が全国最低の47位です。大阪市にいたっては森林率が0パーセント。そんな大阪で木育活動をやっています。NPO法人木育フォーラムの米地といます。私は大阪で祖父が創業した材木屋をやっています。材木屋をやっている私がなぜNPO法人をやっているのか?しかも、なぜ森が全然ない大阪市で木育活動をやっているのか?をお話させていただきたいと存じます。

私がこの業界に入ってから木材業界はどんどん悪くなっていくばかりでした。そこで木材需要が増えるにはどうすれば良いかを考え、たどり着いた方法が木の良さを広く知ってもらうということでした。木はもともと良いものだと思っています。また、日本は木の文化と言われるように、日本人のDNAには木が好きだという遺伝子が組み込まれているように思えます。

木の良さを知ってもらおう、木のファンを増やそう、そうすることが遠回りのようであって木材需要を増やす近道じゃないかと思いました。そこで始めたのがアルブル木工教室という大人向けの木工教室です。木の良さを知ってもらうにはやはり木に触れてもらうことが一

番だと考えたからです。平成20年の春のことでした。

木の良さを発信するといっても、出来たばかりの木工教室をなかなか知ってもらうことはできません。かといって、広告宣伝にかけるお金もない。どうやって知ってもらおうか?と思ったときに考えたのが社会貢献でした。

社会貢献として私たちは木育活動を始めました。地域の小学校へ行って木育の出前授業をやったのです。木育は「木材利用に関する教育活動」で、食育が食と健康を扱っているように、木育は木と環境、木を使うことが環境にとつてどうなのか?という環境教育です。ちょうど環境問題を新聞紙上でも散見するようになり始めた頃でした。

環境の勉強にもなつて、木工でものづくりも楽しめる、そして日常使うものを作ることができる。木育のワークショップはなかなか好評で、年々やらせてもらえる小学校が増えていきました。

すると、アルブル木工教室の生徒さんがボランティアで出前授業を手伝ってくださるようになってきました。生徒さんは木工教室に通うくらい木が好きでものづくりが好きならばかりです。木育活動はうつつけだったのかもしれません。

そして、ボランティア主体で活動していた木

育活動を組織にしようとして特定非営利活動法人を立ち上げました。それがNPO法人木育フォーラムです。平成24年にNPO法人認可を得て、現在に至ります。

取組事例

そんな木育フォーラムの取組をご紹介します。

大阪市内のR保育所の園長先生から依頼がありました。園庭にはプラスチックや金属でできた遊具しかない。子どもたちには自然のものに触れてほしい、子どもたちが園庭で遊ぶためのテーブルとベンチを木で作ってほしいとのこと。

依頼を受けて考えました。単に、注文を受けたテーブルとベンチを作ることはできません。しかし、それだけでは予算もあることですし、大したものを作れず、第一面白くない。どうせなら、子どもたちと一緒にテーブルとベンチを作らせないか?と提案したところ、子どもたちもいい体験になりそうだし是非それでいきましょう!と提案を受け入れてくださり、3回の



園庭のクスノキを囲むテーブルを提案

ワークショップで作ることになりました。

1回目のワークショップでは、子どもたちを私たち木育フオーラムスタッフと保育園の先生方が手伝って作業しました。初めての木工体験に子どもたちはとても楽しそうにしていました。



ワークショップ1日目、先生と子どもたちで

すると、子どもたちが家で話題にしたからでしょう、2回目のワークショップでは保護者の皆さんが参加してくださいました。「ノコギリ触るの中学の技術の授業以来やわあ。」との声も聞かれましたが、皆さん久しぶりのものづくりをとっても楽しんでくれました。



ワークショップ2日目、保護者のみなさんが参加

そして3回目のワークショップ。今度は地域の大人たちが手伝いにと参加してくださいました。中には大工経験者もいらっしやいました。

話を聞きすると、保育園があるのはもちろん知っているし、地域で子育てをという考えも賛成だけど、いつどこに参加していいのかわ



ワークショップ3日目、地域のみなさんも協力

からない、きつかけがなかったとのこと。今回参加できてよかったと喜んでくださいました。

つまり、今回のワークショップ、木工というキーワードで地域が活性化されたんだと思います。ものづくりを通して新しいコミュニティが生まれたとも言えそうです。



完成!

この活動は次の年も継続して行われ、今年で4年目となります。大阪の子どもたちが大阪で生まれ育った木を使ってもものづくりをする。大阪府は森のない都会ですが、その大阪府で木が使われることによって、大阪の森の木が伐られ、間伐が行われることにより、森林が整備される。

日常使えるものを木で作ることによって、日常に木に触れる機会を増やし、日本の森に思いを馳せることのできる子どもたちが増えてくれたらと思います。

今後の展開

木から始まるものづくり、を中心に、日本の森林のことを知ってもらいたい、植える緑化も大切だけど、森のない都会では「使う緑化」、つまり木を使うことも森の整備や緑化につながるということを私たち木育フオーラムは木育活動を通して発信してきました。

それが今回のコロナ禍。出前授業はすべて中止となり、イベントはなくなり、私たちが主催

して行っている活動も自粛を余儀なくされている現状です。

しかし、あれができないこれができないと思っただけでも仕方ありません。この現状でもできること、そして将来につながることをやろうと考えています。

具体的には今まで自分たちのやってきたワークショップのノウハウを動画やテキストにして、新しくサイトを立ち上げオンラインで発信していくことを考えています。

リアルなワークショップができないことは大変残念ですが、逆に考えると、このオンラインでワークショップのノウハウが広がれば、私たちが行かなくても全国各地でも木工ワークショップが開催されることになり、私たちの目的である木育の普及促進にはそちらの方がいいのかもしれない。

そのノウハウ動画を集めるサイトの名前を「みんなのDIY」と名付ける予定です。DIYは本来の意味は“Do it yourself”、自分たちでやろうという意味です。私たちはそのDIYに「D(誰か)、I(一緒に)、Y(やれへん?)」とみんなで地域を盛り上げようという意味を込めました。Yは何故か大阪弁ですが…。

コロナ禍が早く収束することを祈るばかりですが、こんなときでも、こんなときだからこそ、こういう状況でもできることを精一杯やって、これからの展開にしていきたいと思っています。

みんなのDIYが完成した折には、ぜひ一度のぞいていただければ大変嬉しく思います。今後とも、よろしくお願ひします。

地域を巻き込む
男5人によるクロモジストーリー

初代クロモジチーム代表 白川 凜太郎



はじめに

初代クロモジチームリーダーの白川凜太郎です。現在は地元の児童館・こども園で働きながらクロモジ関係の活動をしており、私の住む久万高原町は平均標高800mに位置しており、愛媛県の中で最も土地面積が広く、人口約8000人・高齢化率約50%・森林率約90%とこれだけの情報でもこの地域がどんな状況か分かっていただけたと思います。そんな久万高原町を活気づけようと高校時代の授業をきっかけにスタートしたクロモジチーム男5人の活動についてお話できればと思います。どうぞよろしくお願いします。

初代クロモジチーム結成

初代クロモジチームは久万高原町で育ち地元の上浮穴高校森林環境科に進学した5人から結成されました。森林環境科とは、林業・農業・木材加工など森林環境に関わる様々な分野を学ぶことができる学科です。3年生になると課題研究というテーマを1つ選び1年を通してそれについて研究していくという授業があります。今までの先輩方から引き継ぐテーマもあれば、自分たちの代から花を咲かすテーマもあります。クラスの大半がテーマご

とのグループに分かれていく中、何も決められず行き場を失っていたのが私たちです。そんな私たちに当時の担当教員である橋本先生がクロモジ活動をやってみたいかと声をかけてくれました。そうしてクロモジが何なのか分かっていない余り者たちで結成されたのが初代クロモジチームなのです。今思えば、地域活性化に興味があるわけでもなく、クロモジの事が大好きというわけでもなく、とにかく強い志を持っていた5人ではありませんでした。しかし、そんな5人が活動を進めていく中でクロモジの可能性・久万高原町の現状・久万高原町とクロモジの関係を知り、何気なく始めたはずの5人が気付けば休み時間まで使って熱心に活動するようになっていったのです。



人と町を香りで繋ぐ物語

久万高原町に自生しているクロモジの現状

クロモジ活動を進めていく中でクロモジの

有用性に気付かされた私たちは久万高原町におけるクロモジの現状を知ることになります。冒頭にもお伝えしたとおり、久万高原町の森林率は約90%で、そのうちの約70%は人工林で構成されています。また、伐採して主に利用されているのはスギやヒノキでクロモジは楊枝や団子の串程度にしか利用されていなかったどころか、大半は単に邪魔者扱いされていたのです。そのため多くのクロモジが山に切り捨てられていたり、放置されたりとクロモジの事を深く知ったからこそ悲しい現状でした。そうして何も知らなかった私たちがクロモジを知り、地域を知り、現状を知り、何か行動したいと心を熱くさせられ、クロモジ活動を行う以前には芽生えたこともなかった感情がこのとき初めて生まれたのです。私たち5人の成長とともに課題研究というただの授業ではなく、少しでも久万高原町のためにとメンバー一人一人のクロモジ活動への意識が変わっていったのです。

クロモジ活動

私たちはクロモジの精油に着目して商品開発できないかと試行錯誤を重ね活動していました。

実際に山に入りクロモジを採取するところ

から始まり、採取したものを学校に持ち帰り水蒸気蒸留装置を使って精油にしています。研究段階ではスギ・ヒノキ・マツなどクロモジ以外の精油も採取して幹の部分・葉の部分・混合などそれぞれ香りの比較を行いました。大量の材から絞りだされた精油は少量で改めて精油の価値を実感しました。(材5kgから精油10ml程度)また、実際にクロモジの精油を抽出し始めてから蒸留装置が置いてある教室はもちろんのこと、林業教棟中がクロモジの香りに包まれ一時期は入ってくる他の生徒・先生から「すごいクロモジの匂いがする」とよくつぶやかれたものです。どんな活動の幅が広がっていく中でクロモジ体験ツアーという採取から精油抽出・製品加工まで



家族でほんわかクロモジとり



第一回クロモジ体験ツアー

1日を通して体験的にクロモジを感じられることができる企画を行いました。地元の方からそうでない方まで来てくださり活動した成果を初めて周りに発信していく機会でも、私たちクロモジメンバー5人も手ごたえを感じた企画になりました。また、その際に「男の子5人でアロマの活動をしているなんて面白いね」と言われ、確かにアロマオイルというイメージが強く、男5人で活動していることはどこか不思議で面白いような恥ずかしいようなそんな気がしていました。クロモジ体験ツアーは私たちの代では2回行い、後輩に引き継がれた後も第3回というように行われていく定番の企画となりました。その後、卒業の時期を迎え高校時代の初代クロモジチームの活動は幕を閉じ、クロモジ活動は無事後輩たちへと引



全国ハーブサミットin淡路島



香りの保育が生み出すとびっきりの笑顔

き継がれていきました。

今後

それぞれの道に進んだ私たち初代クロモジメンバーでしたが、社会人・大学生になってからも森のハーバルライフ in 久万高原や全国ハーブサミット in 淡路島、養命酒とのタイアップによるクロモジのど飴モニター調査など、クロモジ関係で声が掛かると快く引き受けて活動しています。今までのクロモジ活動を通して出会った人・経験したことがなかったような活動・周りからの肯定的な言葉がけなど高校時代パツとしなかった私たちに自信をつけ、今まで成長させてくれたクロモジと支えてくれた方々に感謝しています。だからこそ私は恩返しの意味も含め、声が掛ければメンバーを集める限り活動していきたいです。また、勤めている児童館・子ども園では高校時代のつながり経験を活かしながら「香りの保育(香育)」を行っており、地元で育っていく子どもたちに自然の美しさ尊さを伝えていき、その子たちが大人になった時に自然豊かな久万高原町で子育てしたいと思えるような街づくりに貢献していきたいです。



いっぴくいかぐクロモジ茶



竹あかりが教えてくれたこと

西予市地域おこし協力隊 シーバース 玲名



地域おこし協力隊として着任して、10月で3年目になります。わたしのミッションは「復興支援」。2018年7月に西日本豪雨により大きな被害のあった西予市野村町の商店街を中心に、多様な活動を行ってきました。主に、野村町に関わる人を増やすこと、野村町にお金が落ちるようにすることを軸に活動しています。空き家を活用した写真展示会「朝霧寫真館」、商店街を子供たちで練り歩く「のむらハロウィン」。そしてわたしのことを知ってくれている方は、「ゲストハウス」、「竹あかり」のどちらかのキーワードで知ってくれている方が多いかもしれません。

地域PRを目的とした、「えひめの竹あかり」

今回の舞たうんのテーマが森林資源活用ということで、代表として活動させて

いただいている「えひめの竹あかり」の取組みとその想いについて紹介します。

皆さんは「竹あかり」をご存知でしょうか？竹に穴をあけ、光を灯したもので、竹あかり、竹灯籠、竹ぼんぼり：色々と呼び名があるそうです。竹あかりと出会ったのは2018年に豪雨災害支援をしていた時でした。その時は特に気に留めていなかったのですが、協力隊に着任してすぐ、当時の同じ地域の協力隊だった先輩から「全国規模の竹あかりのイベント（みんなの想火）に、愛媛県の代表として参加しないか」と声をかけられます。不安な気持ちもありましたが、全国に向けて野村町を知ってもらえる機会を作れるなら、と思い参加をすることにしました。

放置された竹林たち

地域PRのつもりで始めた竹あかり事業ですが、竹に関わる時間が増えるにつれ気付くことがあります。放置された竹林の存在感がとんでもないのです。皆

さんも、もし山をぼーっと眺める時間があれば見てみてほしいのですが、家の裏など身近な斜面には竹が生い茂っているところが非常に多い。少し調べてみるとその理由はシンプルで、竹はもともと人の生活のための資源として用いられていたため、竹林は人里に身近なところにあるということでした。

竹は古くから人々にとっては身近な資源として活用されてきました。例えば、家の土壁に建築資材として、作物の収穫に用いる背負いかごや腰かごなどの日用品として、そしてタケノコは食用としてなど、多岐にわたっていました。しかし近年竹を使った製品は少なく、タケノコも輸入が主流のため竹林は放置されています。



試しに竹コップを作ってみました



災害の原因にも

そして驚いたのはその成長スピードで、その高さは1日(24時間)に1m以上伸びることもあるそうです。また、竹の根は浅く、地表30〜50cmほどのところで横に伸び続けていき、周辺の雑木林の光を遮断していくため、竹より背の低い木は枯れていきます。雑木林だったところは次々に竹林に変わっていきます。そしてこうした斜面は保水力が低く、根が浅いため土砂崩れや水害の原因となると考えられるのです。

こういったことを知ってからは、竹あかりの活動に地球環境への意識も取り入れられるようになりました。竹あかりを作ることで放置竹林の問題を解決することは難しいかもしれませんが、竹あかりを通してその問題に関心を持つてもらったり、竹製品を使ってもらうきっかけが作ればいいなと思うようになりました。冒頭に私のミッションが復興支援だと書きましたが、災害前よりもよい状態を作る、災害が起こりにくい状態をつくることも活動の一環だと思っております。災害に強いまち野村町をつくることも一つの強みとなるでしょう。



特に春の竹はものすごいスピードで伸びる

竹あかりの魅力

竹あかりの一番の魅力は何でしょうか。多くの人がきくと、灯りそのものの美しさのことを答えるでしょう。確かに、竹あかりは心奪われるほど美しい。作っている時には気付きませんでしたが、完成して展示してみると何とも言えない、優しい灯りで、ずっと見ていられるような、そんな魅力があります。しかし、企画から製作、展示までを行っているからこそ感じる一番

の魅力は、「誰にでもできる作業だが、たくさんさんの力を借りないといけない」ということです。誰に



製作はたくさんのマンパワーがいる



2021年の展示の様子

今後の展望

でもできるということは多くの人にとっても関わりしろがあるということ、関わりしろがあるということはジブンゴトにしてもらいやすいことです。自分が力を貸したことがあるプロジェクトに対して、人間は基本的には放っておけないので、気になり続けてくれたり、そのことについて発信してくれたりします。要するに人を巻き込みやすいイベントだということなのです。

現在、竹あかりの活動は主にボランティアの力と、助成金の上に成り立っています。次の展開は、どのようにしてお金を生み出していくか。野村町に人を呼び込むための活動ではありますが、やはりお金を生み出していかなければ継続することは難しい。継続していくことが、何よりもこれまで力を貸してくれた方々にとつての恩返しになると思うのでしっかり事業化していきたいと考えています。

※竹あかりの作り方 YouTubeで公開しています。よければ、皆さんも作ってみてくださいね。



竹あかりの作り方

えひめ暮らしネットワークの 活動について

「愛媛で自分らしく暮らし働く」ひとたちをつなぎ、支援することを目的に発足した一般社団法人えひめ暮らしネットワークは、設立から2年目の活動を開始しました。見通しの立たないコロナ禍ではありますが、今年度の取組みについて皆様にご報告させていただきます。

えひめ暮らしネットワークとは

代表には、えひめ移住コンシェルジュの板垣が就任し、その他運営メンバーは県内の地域おこし協力隊OB\OGが担当しています。えひめ地域政策研究センターに併設する形で、我々運営メンバーが「日直えひめ暮らし」として日替わりで移住相談及び地域おこし協力隊相談窓口を対応しています。並行して、県からの移住促進関連を中心とした受託事業の実施など、多様な展開を図っています。

「えひめ地域おこし協力隊初任者研修会」の開催

6月11日に、令和3年度より採用された地域おこし協力隊を対象とした初任者研修会を開催しました。総務省の主催による全国からの地域おこし協力隊が集う初任者研修は、昨年より2年連続で中止となつております。このような状況下において、えひめ暮らしネットワークでは、昨年度からオンラインでの初任者研修を開催してきました。協力隊としての活動を円滑にスタートするための方法を、協力隊OB\OGの経験から学ぶことを目的としたこの研修会には、40名の隊員と13名の担当職員が参加しました。

事例発表では、八幡浜市地域おこし協力隊の田川花月光さん、協力隊OGの山口聡子さんにご登壇いただき、それぞれの立場からの取組みについてお話いただきました。また、私からは地域づくりの基本的な考え方といった講演をさせていただきますました。その他にも、参加隊員全員の自己紹介や研修後の交流会を実施



一般社団法人
えひめ暮らしネットワーク
副代表 鍋島 悠弥

し、コロナ禍における交流のきっかけづくりの時間となつたのではないかと感じています。



初任者研修会



プランニング研修会

「えひめ地域おこし協力隊活動プランニング研修会」

初任者研修の他にも令和3年度においては様々な研修を企画、実施しています。

7月28日には、えひめ地域おこし協力隊活動プランニング研修会を開催しました。こちらは、全3回の研修において、「地域での関係構築のプロセス」「課題

抽出の手法」「プランニング作成のポイント」などをOB・OGや現役隊員同士の交流を通じて学び、活動プランのブラッシュアップにつなげるとともに、任期中に発生する課題に対して臨機応変に対応していくスキルの向上を目的とした研修です。私自身も経験があるので、協力隊として活動する3年間はイレギュラーな事態の連続です。しかし、その中で地域との関係構築が形成されたり、思わぬ活動の展開が待ち受けていることもあります。このような研修の機会を通じて、協力隊としての経験値を現場へフィードバックしていくことを大切にしていきたいと考えています。

地域おこし協力隊は、優良事例等について学ぶことも大切ですが、市町を超えた横のつながりによって互いを尊重しあうことが精神的な支えにもなります。私も、協力隊であった頃は随分と県内の隊員の仲間たちに助けられました。地域での活動に邁進しながらも、広くつながりを構築していくことができるのは、大きな財産となります。今後も研修等を通じて、このような関係づくりの機会を創出していこうと思います。

今後の事業展開について

昨年度より実施している「えひめ暮らし仕事体験事業」は、今年度におきましても取組みを継続しています。愛媛県内

の多数の事業者と協力し、仕事を切り口とした移住希望支援である本事業は、新たな移住へのアプローチとしての可能性を秘めています。コロナ禍において思うような事業展開を図ることが困難ではありますが、可能な限りの手段をもって事業の進捗に努めていく所存です。

今後は、県内の地域おこし協力隊及び行政担当職員が集う研修会や、起業支援を目的とした研修の実施も計画しています。

昨年度からのコロナ禍により、都市部で暮らしを送る人々の意識は変化してきました。それを証明するかのように、令和2年度の県内への移住実績は元年度より29%も増加しています。当法人では、引き続き現状において可能な限りの努力を惜しまず、県内への移住促進と地域おこし協力隊の定着サポートへ取り組むとともに、「愛媛で自分らしく暮らし働く」すべてのの方々にとって必要とされる組織を目指していきます。引き続き、よろしくお願いいたします。

☆お知らせコーナー☆

一般社団法人えひめ暮らしネットワークでは、会員を募集しています。協力隊会員、一般会員、賛助会員がごさいますので、是非ご登録ください。



会員登録
QRコード



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

森林資源活用で地域の 未来を伐り拓く

クワガタやカブトムシといった昆虫に夢中になった少年時代の思い出は、大人になった今でも忘れることができない淡く変わり、私たちの暮らしから自然が遠のき、子どもたちの遊びも巣ごもり傾向となつて、自然の中にいるはずのクワガタやカブトムシは今、ペットショップの網囲いの中となつてしまいました。

そんな自然環境を知らない子どもたちに、クワガタやカブトムシ飼育を通して人間性を培ってもらおうと、四十歳を超えた私の長男息子が夏の暑い朝、早起きしてクヌギの森に仲間とともに分け入り、捕獲したクワガタやカブトムシを雄雌一対ずつ虫かごに入れ、夏休みに松山空港のロビーで子どもたちに無償で配りました。大きな植木鉢にクヌギの苗木

を植えてディスプレイした会場に子どもたちが群がり、二日間で予定していた百五十箱の虫かごは全てなくなるほど大盛況でした。クワガタやカブトムシを自然の森で集めるには夜間早朝ゆえ危険や困難も多いことから、人間牧場に造つていた落ち葉ストッカーを使って、養豚業者さんの協力で幼虫を集め養殖を始めました。成虫確保のめどは立ったものの、今度はコロナ禍で空港ロビーが使えなくなり、配布場所を伊予市内の商業施設「町家」と「道の駅クラフトの里」に移して実施してきましたが、四年目の今年も無償配布を計画して準備をしました。

何年か前、宮城県気仙沼のカキ漁師さんが山に木を植えるという面白いニュースが飛び込んできました。畠山重篤さんが中心になつて起こしたこの運動は、「森は海の恋人」という素敵なフレーズもあつて環境を考える社会運動にまで発展し、東日本大震災という大きな試練に遭遇しながら、その価値はますます高まっています。私も何年か前、松山でのシンポジウムで畠山さんと一緒に登壇し、夕日の魅力について語りましたが、全く違った手法のこの二つがSDGsの十七の目標の一つである「14、海の豊か

さを守ろう」と「15、陸の豊かさを守ろう」という二つをドッキングさせる「クヌギの森」を作る里山・里海活動にしようとして三年前から動き始めました。

今、日本の里山は過疎化と高齢化によつて耕作放棄地がどんどん増え、危機的な状況にあります。里海も同じで海岸線にはたくさんさんのプラスチックゴミが漂着し、白砂青松の松も松くい虫の被害に遭つて見る影もなく、荒れるに任せています。そこで目をつけたのはドングリです。大きなクヌギの木は秋になると沢山のドングリの実をつけます。その落ちたドングリを拾い集め、プランターや畑に直播すれば、翌年には芽が出ます。雑草を取り除く程度の世話で、二〜三年もすれば移植可能な五十cmほどの苗木になります。同時進行で耕作放棄地を開墾します。柔らかい下草が生えるようになるには二〜三年かかりますが、苗木の生育と同時なので、三年目の春には植林ができるのです。クヌギの苗木は成長が早く、年には二回の下刈りをして育てれば、十年後には立派なクヌギの木が林、森をつくり、早ければ伐採まで可能だし、一度植林したクヌギの木は、伐採すると切株から新しい芽が出て再び太りだすという、

循環が生まれる優れモノの木なのです。

クヌギの木はシイタケ栽培のホダ木として、またクリーンエネルギーの炭として活用できる有用な山林資源ですが、四季の巡りの中で春に芽吹き、秋に紅葉した葉っぱは地上に落ちて大地を蘇らせる腐葉土となるのです。降った雨はこの腐葉土でろ過され、ミネラルたっぷり栄養豊富な水となり川を流れて海に注ぎ、沿岸の藻場や水性動物を育て、豊かな里海と里山の好循環を生んでいきます。

かつて私は自らが代表を務めるボランティア団体「二十一世紀えひめニューフロンティアグループ」が中心になって、「無人島に挑む少年のつどい」を二十一年間にわたって行いました。その折無人島の砂浜に山のように打ち上げられたプラスチックごみの多さに驚愕しながら、海岸線に五百本のウバメガシを植えました。また里山の荒れるのを見かねて一か所百本の桜を地元住民とともに10か所植える「千本桜の森づくり」もやりました。今にして思えばこの二つの事業は今回の里山にクヌギの森を作る構想のプロトタイプとも言えるべきものだったようです。

森林資源活用には植林した木を大事に育て、高付加価値な木材として販売し財を富ませることが第一ですが、森林の持つ魅力は森を環境の循環場所として考え、水資源の保全は勿論のこと動植物多様性や遊びの空間として、積極的に利用することを考えなければなりません。そのためには未来を担う子どもたちを森に案内し、森が果たす環境浄化の役割と森の魅力や、遊びや育林体験を通してしっかりと伝えなければなりません。

人間牧場では耕作放棄地だった港の見える丘を開墾し、ドングリから育てたクヌギの苗木をとりあえずこの春、子ども体験塾の子どもと一緒に100本植林しました。夏の暑い下草刈りなどを行いなから、毎年とりあえず100本ずつ植林して行く計画です。10年で千本の植林は場所の確保や世話など容易ではありませんが、一緒に汗をかけたりに理念に賛同する協力者を求め、小さな活動を運動にしてい



子ども体験塾でクヌギ苗100本を植林

とりあえず①ドングリと落ち葉を拾い集めドングリ銀行を作る。②ドングリの種を蒔きクヌギの苗を育てる。③耕作放棄地や空き地を探して開墾し、毎年子どもたちと百本単位でクヌギの苗木を植林しクヌギの林や森を作る。④クヌギの森で遊ぶプログラム（ドングリ遊び・カプトムシやクワガタなどの小動物・シイタケ栽培・炭焼きなど）を企画実施する。⑤里山と里海を結ぶイベントを開催し、活動を運動に広げるなど、楽しい夢は果てしなく広がります。こんな他愛のない話を周りの人にすると、「若松さん、貴方はなんぼまで生きるつもりなの？」と呆れ顔されますが、どうやらこの活動は私の最後の仕事になりそうです。

「ドングリを 拾い集めて 種を蒔く
小さな苗木 育てて植栽」
「耕作の 放棄地などに クヌギ苗
植えて植林 環境循環」
「海と森 川が結んで くれる縁 豊かな未来
子どもと一緒に」
「カプトムシ 教えてくれた 繋がりを
小さいけれど 夢は大きく」
(若松進一の実売談)

“MY TOWN” うおっちゃん

歩 & 目 定ラテス

Vol.94

四国唯一の本ウダツ建築・
高田鍼灸院
(八幡浜市)

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

“ウダツ”という言葉聞いて、あああれかと分かる人は何割くらいだろう。税とも卯建とも書くが、常識の範囲に入れるには若い人には酷かも知れない。“うだつが上がらない”という諺もあるが、これとて世代によつてはもはや死語に近い部類に違いない。取り上げるのは、建築様式としてのウダツ。

さて、前置きが長くなったが、中四国、九州では大変珍しい“本ウダツ”の建物八幡浜に一軒ある。いや実は間もなく「あつた」ということになるので、残念ながらここに記録する。場所は市内でも人家が密集する愛宕山下の片山町。昭和7年頃に建てられたというこの2階建ては、元々腕効きの左官だった矢野武

木の家として建てられた。道を挟んで今も稼業されている高田建設さんは、かつて左官業として県内ではつとに知られた存在。その高田左官の先々代鶴一郎氏が大阪に行った際、目にした本ウダツの建物を設計し、その兄弟筋に当たる矢野武木が施工したという事らしい。

裏通りに面しているため、市民でも知らない人が多いと思われるが、愛宕山から見下ろすとその特異な屋根形状に気が付くハズ。通常の切妻屋根の両端が一段



本ウダツの特徴がよく分かる屋根全景



一階部分は袖ウダツ

高くなっている、これが“本ウダツ”。つまりは防火建築の一種なんだが、京都辺りでは町家が櫛比していて、古くは有名な洛中洛外図にも描かれている建物の類焼を防ぐ形。このタイプの分布エリアは近畿及び中部地方。なのでどういふ訳か四国には存在しない。いやいや内子町や卯之町、あるいは「うだつの城下町」で有名な徳島県脇町にはあるじゃないか、という向きはかなりの町並み通。でもそれらは皆“袖ウダツ”という文化圏。類焼を防ぐというよりは、ある種の威勢や装飾性に重きが置かれる。

四国の文化には無い本ウダツが、高田鍼灸院（旧矢野家）のみは前述の経緯によつて八幡浜にたまたま出現した。そうした外観のみならず、内部にも見どころが多い建物なのでご紹介したい。

玄関を入ると、一枚板の上がり櫃（がまち）がまず目に留まる。いや気付かず



結霜ガラスの意匠性



床の間落とし掛けはアベマキか

子 “麻の葉” が見られ、床の間落とし掛けは野趣豊かな面皮付きの自然木、樹種はアベマキか？ 境欄間には四君子（蘭、竹、



二階座敷の書院欄間組み格子



左官仕上げの玄関上がり框

わ）を使用する製作手間やコストの関係で今は作られないと思われるが、こうした味のある和テイストのガラスは復権に値する。

二階座敷には凝った書院欄間の組み格子

にそのまま上がる方が大半か、それほど自然な造りの入魂作で、これは木ではなく年輪模様を左官仕上げとしたもの。

所々のガラス建具には “結霜ガラス” が使われている。これは明治から戦前期頃までの民家でよく見かける、個人的に好きな意匠。膠（にかわ）

菊、梅）の透かし彫り、それぞれ文人画で好まれた春夏秋冬の草花。これら特徴的な花を描くことで、習字の永字八法のように筆遣いが習得された。麻雀をやる人なら花牌の方が分かりやすいかも知れないが。

何れにしてもこの建物からは、左官、大工、指物師などの手わざが至る所に見られ、まさに職人文化の集合体。映画は総合芸術という言い回しがあるが、こうした古民家においては、それは総合文化だとも言え、消えゆくものに対する哀惜は、こうした情感から生まれてくる。豪邸ではないが、質実で生活実感があるこうした得難い建物を継承し得ない地方都市の現実、果たして私たちの “文化のウダツ” は上がるのだろうか。

令和2年度
まちづくり活動
アシスト事業報告

専門家による定例講座

夢をもつて生きていくことが出来る
未来と今だから出来る貴重な体験

代表 小野 志保



地域の宝である子どもたちを地域で守り育てること。

危機や困難に直面したときに乗り越える強い心と生き抜く力。

夢をもつて生きていくことが出来る未来と今だから出来る貴重な体験。

約20年前の悲しい事件をきっかけに情報社会での子どもたちの被害を未然に防ぐために発足したのが「パソきつず」です。パソコだけでではなく、たくさんのお会いとの縁があり、「本物を知ってほしい」との考えで、ご指導くださる専門家の先生方による講座を毎月開催しています。

体験が出来る機会。挑戦すること。興味や関心。触れること。感じる。自信と自己肯定感の醸成。試行錯誤しながら駆け抜けてきました。

発足当時は、友人知人のお子さんからスタートしたパソきつずですが、口コミや紹介により会員数は増加し、地域主導型公民館事業の一環として、パソきつずの活動は公民館事業のひとつになりました。

体験の数だけ思い出がいっぱい

フラワーアレンジメントの先生によるク

リスマスツリー、イラストレーター先生によるエコバック作り、プロダンサーによるダンス講座、韓国栄養士による韓国料理教室、アロマセラピストによるハーブ石鹸づくり、農学博士による椎茸栽培と収穫、防災士による防災キャンプ、ラガーマンによるタグラグビー講座、ほかに多肉植物寄せ植え、生け花、クリスマスケーキやバレンタインチョコ作りなど。たまには外に飛び出し、防災センターでの災害疑似体験、鉱山観光に砂金取り、そうめん流し大会や工場見学、警察署見学、いちご狩り、カー体験や星空観察などのキャンプ、子どもが店長こどもショップ。体験の数だけ思い出があります。

居場所のひとつに

今回、ついに念願だった新居浜市全域の子どもたちを対象に募集を致しました。新型コロナウイルス感染



元気いっぱい!タグラグビー体験



家族で体験!新居浜市防災センター災害疑似体験



心を込めて。バレンタインチョコ作り

症の関係で、運動会の延期による日程重複、感染対策として人数制限と時間差、貸切りでの開催。また、月1回の専門家の先生方による体験講座のほかに、きつず防災フェスも企画してりましたが、やむなく防災講座に変更するなど、大変なことも多かったです。子どもたちを褒めること、子どもたちの話をいっぱい聞くこと。子どもたちの頑張ったところを保護者にお伝えし、保護者の方々からも子育てのお悩みやご相談をお受けすることは、変わらずに。

子どもたちからも「楽しい!来年もあるの?」「保護者の方々からの「是非、来年も!」「早速、来年の予約を!」等お声を多数いただいております。本当にありがとうございます。

笑顔で将来の夢を語れるまちづくり。今だから出来る貴重な体験を子どもたちに。パソきつずの軌跡は奇跡を起こします。

令和2年度
まちづくり活動
アシスト事業報告

「ながはまKururuKurumuマルシェ」で地域貢献
〜未来に向けてより良い地域をつくっていくために〜

はじめに(団体の紹介)：『女性目線のくおもてなし』を

「NPO法人ブルーキャットながはま」は大洲市長浜の地に平成31年3月に女性だけで設立いたしました。

大洲市長浜地域は、地域産業の低迷、また、少子高齢化により地域人口は減少の一途をたどっており、町に活気がなくなりつつあります。

素晴らしい自然いっぱいながはまの長浜にある地域資源を生かしつつ「観光」を作り出し、観光客を呼び込み地域活性化を図りたい。女性達の目線で長浜を訪れる皆様の「おもてなし」を考え、安心して多くの観光客が訪れることができるような環境づくりを行っていき、地域活性化に貢献できたらと考えています。

主論(取組内容)：『ダイスキな長浜をもっと盛り上げたい!』

平成31年3月からNPO法人設立から1年後の令和2年2月に『大好きな長浜をもっと盛り上げた!』そんな想いか



2月マルシェ

ら、第1回の「ながはまKururuKurumuマルシェ」を開催しました。当初は、長浜高校水族館の一般公開日に合わせて、毎月(8、12月1月はお休み)第3土曜日に開催予定としていました。第1回の2月は、

開催場所がJR伊予長浜駅の横の観光案内所ということもあり、約200名の来場者があり、大盛況でした。

しかしながら、3月以降新型コロナウイルス感染症の影響により中止せざるを得ない状況に…。

せっかく初めた新しい取組みなので、様子を見ながら再開を目指して、10月、11月になんとか開催することができました。

ただ、2月に開催した場所は狭く、三密の恐れがあるため、会場を変更し、感



11月マルシェ



10月マルシェ



染防止対策を行つての開催となりました。

ほとんどの

地域イベントが中止になっている中、小規模ながら再開できたことは、地域住民はもちろん、出店者にも大変喜んでいただき、自粛生活のなか、楽しいひと時を過ごしていただいていたのではないかと思います。

今後もより多くの方が楽しんでいただける、リピートしていただけるものにバイジョンアップしながら実施していきます。

まとめ：『長浜の魅力を発信していく』

長浜には国の重要文化財である長浜大橋(赤橋)や世界的にめずらしい気象現象である「肱川あらし」、また長浜高校にある日本唯一の水族館部などがあります。町外から訪れる観光客への受け皿や情報発信力が乏しく、観光資源を有効に活用できていないのが現状です。

今後は長浜ブランドを立ち上げ、「ながはま」の魅力を発信していき、地域活性化につなげていける活動をしていきたいと思っています。

NPO法人
ブルーキャットながはま
代表 宮本 浩子



11.21チラシ

令和2年度
まちづくり活動
アシスト事業報告

「地域新聞みあき」とは

「地域活性化の先にあるモノ」
コロナ禍における地域活動のカタチとは

地域新聞みあき
代表 原田 浩明



およそ170世帯(340人)が暮らす伊予市三秋地区には、地域住民が取材から編集・発行までを手掛ける広報紙があります。それが「地域新聞みあき」であり当団体名であります。平成28年10月に創刊、現在(令和3年5月時点)第13号まで発行されています。紙面はA3判4ページで、行事や防災、史跡など地域に密着した様々な話題を年3回ペースでお伝えしています。きっかけは、20年近く地元を離れていた私がUターンした時、「少子高齢化で行事参加者が減り、お互いの顔が見えにくくなった」と思ったことから。過疎高齢化の進む三秋地区を元気にしようと、現在10名の地元有志が仕事の傍ら活動しており、時に地域活性化を目的としたイベントの運営も行っていきます。

新型コロナに対応した
イベント開催を模索

地域活性化を目的として昨年からは始めた「レンコン収穫体験会」を継続しよう



レンコン収穫体験会

と計画していたところに新型コロナの流行で一時期開催が危ぶまれましたが、次のような対策を行うことで、令和2年11月8日、22日の2日間にもわたり開催することが出来ました。



レンコン収穫体験会スタッフ集合

① 新型コロナ対策万全に

密を避けるため1回の人数を制限し、参加者全員の検温、マスク、消毒を徹底。2日間感染者を出さずことなく無事終えることが出来ました。

② 積極的にPR活動

まつやま花園日曜市に参加し、イベントをPR。立ち寄った方からお問合せを頂いたことで、一定の宣伝効果を得ることが出来ました。

③ 公式HPを開設

参加申込み方法をネット申込みに一元化。公式HPを立ち上げ、申込みページに誘導し易くしました。これにより電話対応の負担が軽減されました。

④ 若い力が大きくプラスに

コロナ禍での今回のイベント成功は大きな収穫でした。また、これらのイベント等を当新聞で伝えてきたことで、地域住民はもとより、地域外からの評価の声も徐々に増えてきています。今後この活動を継続し、地域の一大イベントに育てていきたいと思えます。



花園日曜市

継続は力なり

参加者からのアンケートの結果、9割以上の方からイベント内容に満足し、次回も参加したいとの感想を頂きました。また、コロナ対策についても概ね評価を頂きました。

令和2年度
まちづくり活動
アシスト事業報告

「閉校した小学校の有効利用で地域
活性化を目指して!!」

中浦会
代表 藤田 一郎



はじめに

愛媛県の最南端にある愛南町は、平成16年10月1日に南宇和郡5か町村(内海村・御荘町・城辺町・一本松町・西海町)が合併して発足し、当時約27000人いた人口が、少子高齢化の影響で現在は、20420人(令和3年3月1日現在)と減少しています。ここ中浦地区には、中学校や小学校があり、中浦公民館を拠点として、小・中学生や地域住民等を中心にイベントや事業など色々な活動を行っていました。少子化の波により平成21年3月に中浦中学校が閉校し、平成30年3月には、中浦小学校が閉校しました。

設立にあたって

閉校になった中浦小学校を有効利用出来ないかと考え、中浦公民館長、中浦地区の区長や有志、その他各種団体の長で協議を行い、平成30年4月に「中浦小学校の有効利用を考える会」を設立し、代表に中浦公民館長の私が就き、構成委員に中浦地区の有志や各種団体の長で結成しました。

どのように活用していくか?

初回の会議で「会の設立」、「施設の有効

利用」については、賛同を得ましたが、今後「どのように活用していくか?」について、何度か協議を重ね、まずは、何をするかと言うことで「船舶講習の受入」、「海の学校」、「夏季合宿」、「外国人研修生の受入」など様々な意見が出ました。その中で中浦地区で平成26年から現在まで愛南漁協が行っている外国人(インドネシア研修生)漁業技能実習(12月~2月)を足掛かりに徐々に増やしていく方向で話を進めて行くようになりました。

活動のための施設改修

2年目の令和元年度に簡易宿泊施設として利用するため、町の補助事業を活用して最低限の簡易シャワー設備等の改修を行いました。また、寝床用に職員室等に畳を敷き、寝泊り出来るよう整備し、夏場に快適な利用ができるよう窓用のクーラーを設置しました。

活動状況

これにより、8月には、以前から交流の



窓用クーラー設置状況

あった松山将棋センターの子供たちを招待して、2泊3日の夏季合宿(将棋交流会)を実施し、昼は、将棋の対局、夜は、バーベキュー等を行い、地域住民との交流を深めました。令和2年度に「中浦小学校の有効利用を考える会」という名称を地域に親しみやすくするため「中浦会」と改名し、施設の環境整備のため、8月にグラウンドの除草作業を行いました。また、計画していた夏季合宿(将棋交流会)は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむなく中止しました。

まとめ

今後も閉校施設の整備等を行って、季節を問わず、地域の特色を生かした体験型事業や、継続して夏季合宿の誘致を行い、地域の子供や高齢者との交流の場として活用し、また、簡易的な宿泊施設として有効利用を目指していきたいと思えます。



将棋対局交流会(夏季合宿)



グラウンド整備(除草作業)

令和2年度
まちづくり活動
アシスト事業報告

「中萩親路の会の活動と、助成金の活用について」

中萩親路の会
会長 村尾 孝志

私たちにについて

私たち「中萩親路の会」は、中萩中学校PTA執行部OB、OGと中萩中学校おやじの会OBが中心となつて、平成30年5月に結成しました。現時点のメンバーは総勢16名です。中萩親路(おやじ)の会は、おやじの会という名前から男性のイメージがありますが女性のほうが多いです。

結成の直接的なきっかけとしては、市内の小中学校すべてが、平成30年度からユネスコスクールとして、地域に開かれた学校となることが教育委員会により決められたものの、地域に、学校からの要請を一手に受け入れることができるような組織が存在しないことから、私たちが組織をつくらうということになりました。いろいろな活動をしていますが、一番最初からずっと継続しており、私たちが一番取り組んでいる活動が、環境美化活動である自然園(河川区域Ⅱ約6000㎡)の草刈りです。新居浜市と覚書を結び、アダプトプログラムとして年3回の草刈りをしています。新居浜市からは刈った草を入れるゴミ袋の無償提供と、清掃センターに草を持ち込んだ際の処分費の減免(免除)を受けています。それ以外の支援はありません。その他必要と

なる経費については、自分たちで稼いだり、自分たちで負担して地域のために活動運営しています。

助成金をいただいて実施した活動

私たちの規約にもあるように「できる人ができる時にやる」としており強制はしないルールにしていますが、メンバーみんなが極力予定を調整して取り組んでいます。しかし、少ない人数で草刈りをするのもままあり、少人数の場合は全体の草刈りを一日で終了することは困難でした。このような状況の中、ECPRの助成金をいただき、歩行型草刈機を1台購入し、自然園の草刈り5回など地域の草刈りに活用しました。活用して一番



楽々と草刈り



歩行型草刈り機講習

良かったと思ったことは、準備や片付け、人員の調整に今までかかっていた労力と時間が大幅に削減できたことです。ただ、その空いた時間を他の地域活動をする時間にしようと考えていきましたが、地域の行事、イベント等は、ほとんど中止となったため今年度については出来ませんでした。



草刈り後



草刈り前

これからの地域活動

コロナで地域の行事も中止が相次いでいます。コロナが落ち着くまで行事の再開も難しいかもしれません。それでも、先日も文化祭が開催された場合を考え、今年もさつまいもの苗を植えました。中萩親路の会みんなでこれからも地域活動を進めていきます。

令和2年度
まちづくり活動
アシスト事業報告

豊富な資料と貴重な人材

地域のお宝再発見「潮見地区史跡八十八ヶ所巡り」
「いっしょにやるやー宝さがしのまち歩き」

潮見地区は、松山市の中心部から北へ程よく離れたロケーションで自然にも恵まれ、近隣に多くの商業施設も建ち並ぶ住みよい町です。一方で城を北方から攻め入る敵への戦略として作られた七曲り跡や、遍路道に残された弘法大師にまつわる言い伝えなどの歴史文化遺産も数多くあります。

昔話を伝えてくれる人や、ほのぼのとした絵を提供してくれる人がいて、自然と集まってきた資料を残しておきたいと思ったのが、冊子作りのきっかけとなりました。

目標(ゴール)の設定が、やる気につながる

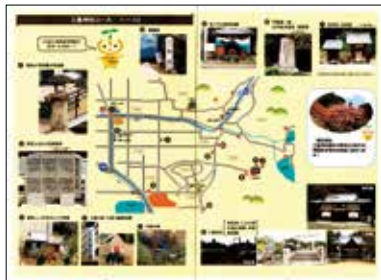
2年かけてすでに集まっている資料の確認調査をほぼ終了し、編集委員会を立ち上げた後は、地域学習で関わった中学生の意見も取り入れた編集作業。



編集委員会の様子



表紙



冊子抜粋(コースの紹介)

巡行箇所の中には普段目に触れない険しいところもあり、巡行者の興味や体力に合わせた散歩やハイキングのコースとして利用できるよう、8コースと番外編2コースをモデルとして紹介しています。また、「潮見地区史跡八十八ヶ所巡り」巡行完結者には四国遍路にちなんだ結願スタンプを冊子に押捺し、ホームページや地区の広報紙で紹介することになりました。

まだまだ続く活用術

潮見地区
まちづくり協議会
会長 畑中 俊三



これまで作成してきた冊子と同様に地区の小中学校には無償配布し、地域学習の一助としていただきました。



マップ表

健康づくりイベントに活用したいとの要望があり、販売も順調で早くも増刷を余儀なくされています。今後は、各巡行先に史跡看板を順次設置するなど、より分かりやすくなるよう工夫を凝らしているところですが、「行って来たよ」とクタクタになったマップと冊子を手で結願スタンプを押しに来られた方の楽しいエピソードや苦労話は、これからの活用方法のヒントになっています。潮見地区のあちこちで、冊子やマップを片手にしたウォーキング姿を見かけられるようになればと思っています。

研究員 卒業レポート

センターでの2年間で振り返って

客員研究員(今治市役所) 徳永 瑠衣

はじめに

私は令和元年度から2年間、公益財団法人えひめ地域政策研究センター(以下、センター)に在籍させていただきました。センター職員は、ほぼ全員が出向者で構成されています。そのため、1つの業務に対して多角的なアプローチが浮かび上がってくる職場は、いつも気兼ねなく意見交換ができる場でした。そして、やはり出会いが全てだったと思います。本紙連載中の若松進一氏や岡崎直司氏をはじめ、地域づくり活動の先駆者の方々や移住支援団体の方々、行政職員の方々と、多くの出会いに恵まれた2年間でした。

事業を通じた出会い

在籍中には多くの地域を訪れましたが、特に南予地域は新たな発見の連続であり、大きく印象に残っています。例えば、集落活性化意識醸成



原木椎茸の栽培地

支援事業では、農産物のブランド化に取り組み西予市横林地区にて、大学生や地域の皆さんとともに原木椎茸の栽培地や商店などを巡るフィールドワークを行いました。さらに(一社)持続可能な地域社会総合研究所の藤山浩先生による人口分析結果と目標設定への助言を元にした地域分析ワークショップを行い、これからの横林について話し合いました。市職員として、他市町の特定の地域に継続して関わるという大変貴重な機会をいただきましたし、他の地域に触れることで、自分が思っていたよりもずっと狭い視野で今治市を見ていたことにも気付かされました。横林地区を含む、令和2年度に事業を実施した5地区の様子については、センターのホームページで学生の皆さんがブログ形式で紹介してくださっていますので、是非チェックしてみてください。



ECPR college

また、移住促進の分野については、在籍2年目を迎える直前から始まったコロナ禍の影響で、実施が叶わなかった事業も多くあり、正直なところ心残りもありました。しかし、移住フェアがオンライン開催となったことで、ライブ配信やオンライン交流会といった新たな取組みにもいち早く触れることができ、これらの経験は現在の職場でも大いに役立っています。

おわりに

センターの事業は、先を見据えて根気強く進む必要があるものばかりです。自分がお役に立てたかどうか、その結論が出るのは少しばかり先のことになるかもしれませんが、先進事例を学びながら地域課題解決に向けて皆さまとともに取り組んだことは、私にとつて今後の大きな糧となりました。これもひとえに、お力添えを頂いたセンター職員の皆さまや、関係団体の皆さま、地域の皆さま方のおかげです。2年間、本当にありがとうございました。

支援助業では、農産物のブランド化に取り組み西予市横林地区にて、大学生や地域の皆さんとともに原木椎茸の栽培地や商店などを巡るフィールドワークを行いました。



愛あるえひめ暮らしフェア

の影響で、実施が叶わなかった事業も多くあり、正直なところ心残りもありました。しかし、移住フェアがオンライン開催となったことで、ライブ配信やオンライン交流



オンライン移住フェアの裏側



インターネットによる情報発信 強化中!!

えひめ地域政策研究センター



ホームページ『ECPR』
<http://www.ecpr.or.jp/>



『えひめ地域政策研究センター』
<https://www.facebook.com/ECPR0899262200/>



愛媛ふるさと暮らし応援センター



愛媛県移住ポータルサイト『えひめ移住ネット』
<https://e-iju.net/>



『えひめ移住コンシェルジュ』
<https://www.facebook.com/iju.ehime/>



「えひめ地域づくり研究会議」会員募集中!

～地域の未来を共に考え、行動しよう～

「えひめ地域づくり研究会議」は、地域づくりに関する「情報交流の場・情報公開の場・学習と研究の場」として、昭和62年(1987年)11月に設立された団体で、令和2年度には、愛媛経済同友会の第34回「美しいまちづくり賞」(地域活性化活動部門)を受賞しました。

人口減少社会への対応や身近な地域課題の解決へ向けて、約100名の仲間と共に、年次フォーラムや地域フォーラムの開催、高校生等の地域づくり活動支援などを通じて、学習や研究活動、会員の情報交換などを行っています。

特に、近年、人口減少社会に挑む地域社会や人材育成を応援するため、愛媛大学やえひめ地域政策研究センター等と連携し、年次フォーラムを開催しています。今年度は、令和3年12月11日(土)、「人口減少社会に挑む!フォーラム2021」を開催予定ですので、詳細はフェイスブック等でご確認ください。

また、会員へのサービスとして、えひめ地域政策研究センターの協力をいただき、情報誌「舞たうん」等の資料提供、フォーラム等研究会議の活動情報発信などを行っています。

地域づくりに関心がある皆さん、地域への夢や悩みをお持ちの皆さんのご参加をお待ちしています。



「研究会議の活動状況や入会の申し込みは」
<http://www.ecpr.or.jp/actions/research-conference/>
年会費3,000円(随時加入できます)



「facebookで情報発信中」
<https://www.facebook.com/kazeokoshi/>



研究会議についての
お問い合わせは

「えひめ地域づくり研究会議事務局」
(えひめ地域政策研究センター内)

Tel.089-926-2200
E-mail.info@ecpr.or.jp

地域の皆様の大きな力が明日の愛媛を創ります!

愛媛の地域活性化にご協力いただいている皆様

◇公益財団法人 えひめ地域政策研究センター<<賛助会員>>

(株)愛亀	岡田電機(株)	日新化学工業(株)
(株)あいテレビ	越智今治農業協同組合	日滝工業(株)
(株)アットハウジング	(株)門屋組	日本食研ホールディングス(株)
(株)アサヒジム	(株)カナックス	(株)日本政策投資銀行
一宮運輸(株)	(学)河原学園	日本放送協会
(株)伊予銀行	キスケ(株)	(有)ネクストクルー
伊予商工会議所	(株)久保建設	(株)野間工務店
(株)伊予鉄高島屋	佐川印刷(株)	(株)ハタダ
(医)尚温会伊予病院	三星道路(株)	(株)濱崎組
(株)宇高	三創印刷(株)	(株)フジ
内子町商工会	四国ガス(株)	フジボウ愛媛(株)
(株)うわじま産業振興公社	四国経済連合会	(株)芙蓉コンサルタント
宇和島自動車(株)	四国建販(株)	平和印刷工業(株)
宇和島信用金庫	四国電力(株)	松山空港ビル(株)
(株)エイト日本技術開発	四国乳業(株)	松山商工会議所
(株)愛媛銀行	四国旅客鉄道(株)	松山総合開発(株)
愛媛経済同友会	しまなみ商工会	丸三産業(株)
愛媛県漁業協同組合	生活協同組合コープえひめ	丸住製紙(株)
愛媛県商工会議所連合会	セキ(株)	マルマストリグ(株)
愛媛県商工会連合会	全国共済農業協同組合連合会	三浦工業(株)
愛媛県信用漁業協同組合連合会	全国農業協同組合連合会	(株)美川建設
愛媛県信用保証協会	大一ガス(株)	三原産業(株)
愛媛県信用農業協同組合連合会	(株)ダイキアクス	村上産業(株)
愛媛県中小企業団体中央会	(株)大建設計工務	ヤマキ(株)
愛媛県農業協同組合中央会	大八工業(株)	(株)山本建設
愛媛県酪農業協同組合連合会	(株)玉井歯科商店	八幡浜紙業(株)
(株)愛媛CATV	(一財)地方自治研究機構	八幡浜商工会議所
愛媛飼料産業(株)	津島町商工会	吉田三間商工会
(株)愛媛新聞社	(株)テレビ愛媛	(株)ヨンキュウ
愛媛信用金庫	(株)デンカ	四電ビジネス(株)
えひめ中央農業協同組合	(株)藤堂組	(株)よんやく
愛媛中小企業指導センター	トータスエンジニアリング(株)	個人会員
(株)愛媛電算	砥部町商工会	
愛媛土建(株)	南海放送(株)	
愛媛冷暖房(株)	南予興業(株)	
(株)エフエム愛媛	南レク(株)	
岡田印刷(株)	(株)西村商事	

※順不同・敬称略
※個人会員名称は個人情報
保護のため未掲載
2021年8月31日現在

賛助会員 大募集!!

～皆様の力で地域に明るい未来を～

地域社会は今、大きな転換期を迎えています。

人口減少と少子高齢化の進行という極めて困難な課題を抱え、地域社会そのものの存続が懸念される中でも、人々は明日を見据え豊かな地域社会を目指して努力し続けています。

えひめ地域政策研究センターは、これからも地域社会の存続と活性化に向けて地域とともに行動していきます。

そこで、安定した事業運営を行うため、当センターでは諸活動を通して地域活性化を支える方々のネットワークとなる「賛助会員」制度を設けています。趣旨にご賛同いただきまして、ご入会いただきますようお願い申し上げます。なお、当センターの事業内容につきましては、ホームページ(<http://www.ecpr.or.jp>)をご覧ください。幸いです。

皆様のご入会を随時お受けしています。詳細は当センターまでお問い合わせください。

●法人会員[一口] 30,000円/年(複数口申込可) ●個人会員[一口] 3,000円/年(複数口申込可)

《主な会員特典》

1. 定期刊行物(「舞たうん」・「ECPR」・「えひめイベントBOX」等)の無償配布
2. 当センターが主催する講演会・セミナー等への優先的なご案内 他

申込先

公益財団法人 えひめ地域政策研究センター
〒790-0065
松山市宮西1丁目5-19(愛媛県商工会連合会館3階)
電話:089-926-2200 FAX:089-926-2205
E-mail:info-team@ecpr.or.jp



ハロウィン ジャンボ 5 億円

ハロウィン ジャンボ

5 千万円

当せん
の
チャンス
広がる

1等前後賞合わせて5億円
1等3億円、前後賞各1億円

この宝くじの収益金は
市町村の明るいまちづくりや
環境対策、高齢化対策など
地域住民の福祉向上
のために使われます。

1等前後賞合わせて5,000万円
1等3,000万円、前後賞各1,000万円

2つのジャンボで 欲張りハロウィン。

ネット購入は
こちらから!



宝くじ公式サイト

<https://www.takarakuji-official.jp/>

9月22日(水)

同時 発売

各1枚300円

一般財団法人 全国市町村振興協会

2021年 市町村振興宝くじ

発売期間 9月22日(水)～10月22日(金) 抽せん日 10月29日(金)

【編集後記】

私のふるさと鬼北町の隣町、高知県橋原町のまちづくりに携わっていると、世界的建築家の隈研吾さんが、テレビで言われていた言葉が印象に残っています。
「日本をもう一度『木の国』にしたいというのが夢ですね。木に囲まれると人間って優しくなる気がして、ギスギスしたコンクリートの街から、もう一回優しくて温かい木の街になると、人間も変わるんじゃないかなあ...」

人間が木や山、自然ともっと関わりながら、循環できる社会を構築していくことが、未来を良くすることにつながると思います。そのために、小さな田舎でもできる小さな取組みが、たくさんあるのではないのでしょうか。小さな地域単位の森林資源循環の取組みによって、日本全体、ひいては世界全体が良くなっていくことを願っています。

最後に、御協力いただきました皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。
(兵頭)

本誌へのご意見やまちづくり活動のトピックスなどがありましたら、お気軽に当センターまでお寄せください。
〒790010065

松山市宮西一丁目五番十九号

愛媛県商工会連合会館三階

(公財)えひめ地域政策研究センター

TEL 089(926)2200

FAX 089(926)2205

発行/令和3年10月1日

(公財)えひめ地域政策

研究センター

(公財)愛媛県市町振興協会

印刷/平和印刷工業株式会社